

## シティズンシップにつながる遊びの場 —プレーパークの実践をもとに—



開催日時：2022年12月04日（日）10:00～11:30 実施形態：Zoom

参加者数：13名（運営メンバー含む）

話題提供者：石原遼さん（のざわテットーひろば）

### 趣旨説明

今回のテーマは、子どもの遊びを通じた「シティズンシップ」の可能性です。世田谷区にある乳幼児中心のプレーパーク「のざわテットーひろば」でプレーリーダーとしてご勤務されている石原遼さんをお迎えし、「遊び」の持つ価値とシティズンシップや子どもの権利との結びつき、さらに子ども以外のあらゆる人にとっての「シティズンシップ」や市民活動に繋がる可能性についても検討しました。

### 石原遼さんによる話題提供 概要

まずはじめに石原さんから、「子どものときに、「遊び」をしたことはありますか？」「遊ぶってどういう行動なのでしょう？」等の質問が投げかけられました。参加者の皆さんから「遊び」について「夢中になること」「主体的、楽しい、体感的」など様々なコメントが寄せられました。石原さんが考える「遊び」とは、自分の内側から「やりたい！」という気持ちを行動に移すことであり、プレーパークでは、子どもたちの「やりたい！」を実現するためのさまざまな工夫が凝らされています。特徴的なのは、遊具設計や禁止事項についての考え方です。一般的な公園では、安全性を第一に考えられており、「大きな声を出さない」「ボール遊びは禁止」など、数多くの禁止事項があります。一方でプレーパークでは、子どもたちの「遊び」を保障するため、できる限り禁止事項を設けていません。遊びにおけるハザード（目に見えない危険要因）を事前に予測したうえでリスクを出来る限り残すという考え方のもと、火の使用などができるプレーパークもあります。遊びには失敗がつきものであるからこそ、大人側が一方向的に禁止するのではなく一緒に考えることで、子ども自身の学びや成長につながります。

	一般的な公園	プレーパーク
遊具設計	<ul style="list-style-type: none"> <li>・手すりがついた安全な遊具</li> <li>・事故が発生したら撤去</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・リスクとハザードの観点で設計された手作り遊具</li> </ul>
禁止事項	<ul style="list-style-type: none"> <li>・禁止事項が多い</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・禁止事項が少ない</li> <li>・“ケガと弁当、自分持ち”</li> </ul>
運営者	<ul style="list-style-type: none"> <li>・行政主体</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・NPO や市民団体などの住民運営</li> </ul>

「一般的な公園」と「プレーパーク」の違い（石原遼さんの講演資料より一部抜粋）

一方で、現在の子どもの遊びを取り巻く状況については、「仲間（一緒に遊ぶ仲間）」「時間（放課後や休日に遊ぶ時間）」「空間（外遊びできる場所）」「隙間（子どもへの禁止事項が増え、家庭や社会と子どもとの隙間）」という「4つの間」がいずれも減少しているという指摘もありました。最近では、こども家庭庁の設置などをきっかけとして、全国で子どもの権利を保障する動きが高まってきています。石原さんは、プレーパークの取り組みを通じて、「遊び」の価値や重要性をさらに広げていきたいと話します。

## プレーパークとシティズンシップとの関連性

石原さんからは、「のざわテッターひろばの実践がプレーパークのすべてではなく、またシティズンシップ醸成だけを目的として掲げている訳ではない」という前置きがあったうえで、プレーパークにおけるシティズンシップとのつながりについて丁寧に解説いただきました。前述のようにプレーパークでは、そこで遊ぶ子どもたちが遊びを主体的に決定できるだけでなく、遊びをとおしてプレーパークの環境づくりや運営にも参画できる余地があり、こういった点もシティズンシップを育む大切な要素になっています。そして注目すべきは、「おとな」や「若者」も、プレーパークのづくり手である、ということです。そもそも住民運営で成り立っているプレーパークでは、運営者と来園者は、支援する／される関係ではなく、一緒にアイデアを出し合い、ともに場づくりを行います。「シティズンシップを育てるためには、与えられた枠に参加する“お客様”ではなく、自らの手でつくりカタチにする経験こそが必要であり、子ども・若者だけでなく、大人自身もそんな経験を重ねていくことが重要」と石原さん。子どもだけでなく、おとなの「やってみたい」も大切に、みんなで実現していく。プレーパークで日々行われている取り組みから、シティズンシップを考えるための大切なヒントを得ることができました。

## 参加者の皆さんの声

イベントの最後には、石原さんの話題提供を受けて、参加者同士で気づいたことや学びをシェアしました。こちらでは、感想の一部をご紹介します。

- プレーパークは子どもたちを「育てる」のではなく、子どもたちが自ら「育つ」場所だと感じた。
- プレーパークの話と引きこもり支援の現場において、「子どもの声を行政に反映する」「やってみようという気持ちを尊重する」といった観点が重なるように感じた。子どもを子ども扱いするのではなく、一人の人として尊重する形になればいいと思う。
- ふらっとプレーパークに立ち寄ったおとなが、運営に関わっていくプロセスに興味をわいた。やや消費者的に子どもを連れていく段階から、運営に関わっていく段階に変わっていく場面や雰囲気が素敵だと感じた。
- 赤ちゃんのシティズンシップの話が重要だと思った。「子どもの意見表明」というときの「意見」の英語表記は「opinion」ではなく「view」で、こどもの視点からどう見えているのが重要。そういう意味では、赤ちゃんのように不完全でも「view」のまま表出する機会が少ないと感じた。 他

以上、年内最後の充実したスタスタとなりました。来年のスタスタもお楽しみに！

（主な運営スタッフ：斉藤、別木、岡本、古野 報告書担当：古野）